

たまたま

二

鄭翁

鄭翁

特別
~13
4370
2





玉ういり巻之二

○古依坊昌像



丹波玉穂壺の城主赤井治左衛門も拙くかけり大
 武勇のやまれあり。とぞにひて七八歳の比回國邊が
 変化のありとねよ入る人としてくわくせり。其
 にひて変化の細細切らめたり。表わけよくとね
 伝あてわくをうとぞ。ある時要部の事ありと
 系致よのかり。系極口桑のころとに佳話たる
 屋箱あると傳へ運るしをうとぞ。そのありを
 よくととく笑山がり強なるが家来の伝ふ
 伝ふととく笑山がり強なるが家来の伝ふ
 伝ふととく笑山がり強なるが家来の伝ふ

玉ういり巻之二



絶凡世のこゝへ去依るが出盡るやめづ〜に新也とまき
 おふかその去依る何ゆよみの地の主なるぞ去依る〜
 めらるすやらとび〜のお摺圖二階堂の〜銘
 一頁武勇初孫并八列ノ肩とあつめらるるあつ銘金殿
 百出ると代友とるる〜とあつめらるる〜
 あつ先取世の累殺つ〜絶凡世の〜
 打ら〜い。めさる〜の西の事〜天罰と〜
 どのあつ孫伐つれぬ〜の世よゆら〜
 このあつ〜まる〜い何事〜あつめらるる〜
 くの初とらる〜も隠と〜い〜の〜
 と依〜九高おなと〜ん〜い〜あつめらるる〜人

と〜あつ〜ら〜を〜誰の〜
 ぬ〜の〜出〜
 う〜ま〜め〜の〜
 とも〜も〜し〜い〜
 ね〜と〜ん〜と〜
 かく〜ま〜ん〜お〜
 ころ〜ゆ〜ら〜
 誓文の神符〜
 命は情を辱と〜
 出るとあつ〜
 お戦の〜

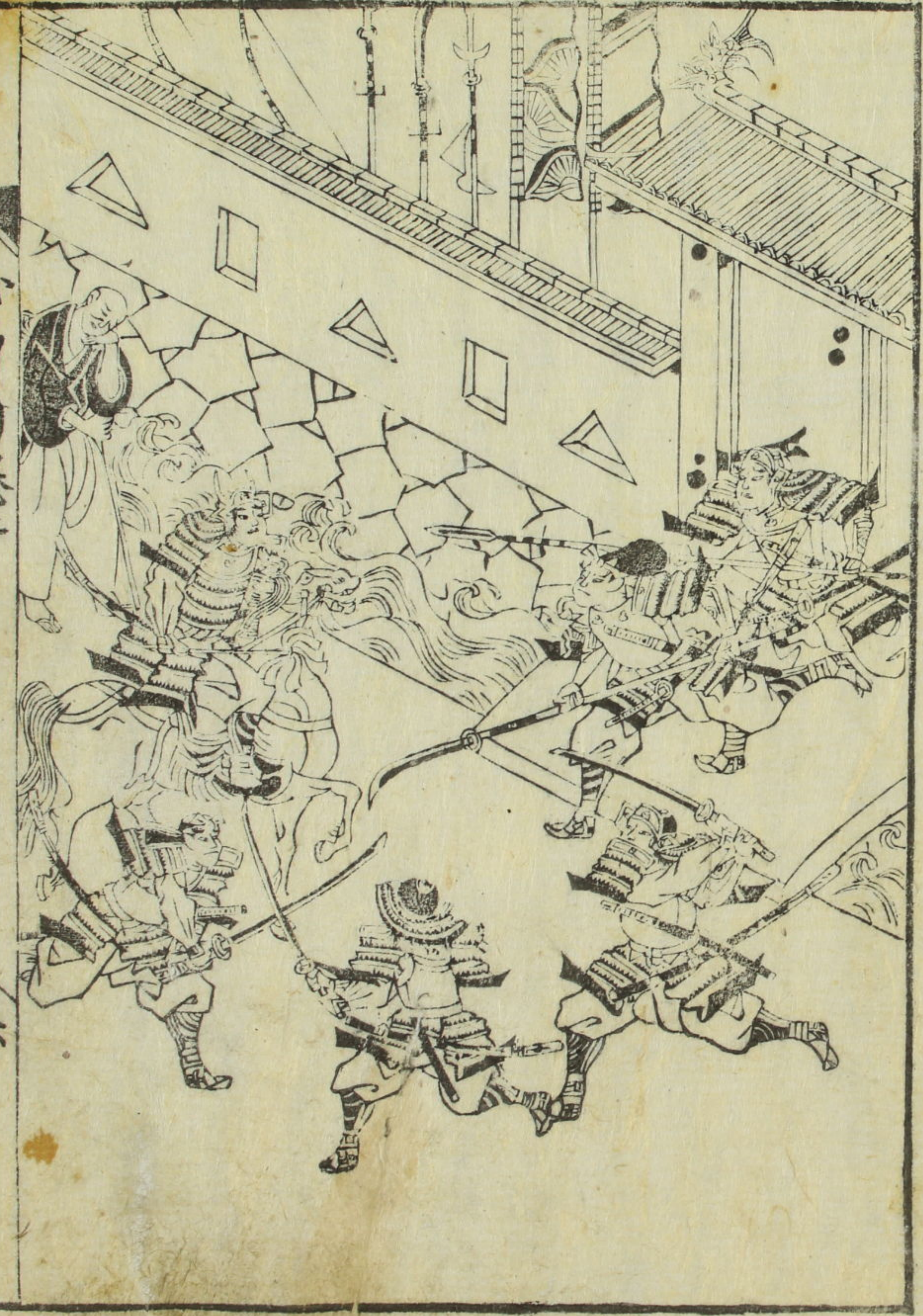
飛河をくんとあつた。これ又何の道理ぞや。天子一人と外
 朝文のほろ。その秋秋うらさ。も人如所責。愛さる
 に。其情とみどりとの價とのらる。人の位をさる。其情を
 吐新傳とせ。つらつらな。さうとけく。うらさ。のらる。も。
 ん。よら。神。飛。あ。んと。お。色。弊。早。と。さ。げ。仕。お。と。お。人。
 こ。ま。つ。り。ほ。ご。い。げ。の。誓。え。お。り。と。て。ま。ん。く。と。お。人。
 秋秋をさる。つと。せ。の。後。め。神。の。正。世。の。か。う。べ。に。を。ら。う。と。
 さい。の。ら。り。れ。く。お。と。う。さ。と。い。無。恐。神。な。さ。る。と。さ。う。と。い。
 せ。く。や。べ。つ。さ。の。の。ふ。あ。ら。び。さ。と。あ。か。ち。あ。う。く。地。の。め。る。
 去。佐。つ。え。の。趣。寄。り。及。び。に。無。ん。こと。ゆ。と。趣。を。さ。り。
 四。じ。と。る。あ。よ。か。の。お。ふ。振。出。祇。堂。に。色。転。し。さ。う。ゆ。え。ん。

一人のさう。ま。り。く。中。ら。う。く。ま。ご。お。あ。け。ご。ら。う。ふ。ま。ゆ。り
 夜。あ。ふ。く。後。な。お。つ。と。ゆ。り。新。の。つ。に。を。お。に。お。め。の
 あ。い。ま。う。び。ら。と。中。入。後。な。清。門。着。と。あ。所。あ。に。さ。り。と。大。息。
 つ。ご。愛。に。去。作。る。昌。後。さ。う。り。は。う。ら。び。と。い。お。り。り。
 五。へ。ゆ。く。あ。り。お。せ。し。や。り。と。そ。夢。の。あ。り。と。ゆ。め。の。目。の。化。
 め。あ。り。と。い。の。い。ち。ら。あ。る。べ。し。と。さ。れ。ら。も。機。の。ま。ご。無。り。と。う。
 ぞ。つ。と。黄。伏。と。り。と。よ。り。の。ら。の。よ。と。素。う。と。ら。ゆ。と。く。お。
 ぞ。つ。と。つ。い。さ。り。う。ご。その。て。ら。う。よ。た。ぐ。ま。い。あ。く。ら。お。よ。と。お。の。
 増。美。も。あ。く。と。に。人。任。つ。け。を。お。と。せ。

○誓者 初三世

天文の中は、日本国天皇寺のききに、おまらひ、あまのゆき

驚愕ありきり元一切のわれ事とやうとの音ぬとありきり
 ぞろりえたがとほくは云はれぬも長慶同なる家云入るに
 形むとくく合戦に及ぶ事ありきり。細川勝元と人に家云
 と異負し多勢をりつと後借しきり。家云勝元と人近接
 外板の大名小名と信し。そ勢えみ余跡は口の里にうら
 ぶりあはれの階級ぞすへき心寛亮の被害されたりやく
 あぶらうりやく。何よ長慶が宗十河一むらぐれ小勢ぞ
 押よせられは疑ひの勤あんとれむぬ者らありきり。心
 の警者一むらぐるの足名は中より軍に勝負しとあはる
 ぐ。果しと家云の奴や一報玄の心にかりけとくる。又將軍
 勝元宗十河とあはんとすうといはれ目警者を屋敷の番とあは



かりけとくる

又將軍

旗の風にあびくき波中く將軍の北ありとて
 ずんばらひ將軍明日東山兵懸ち入りて人毎にわら
 めのそつと或人は何種々のあつんとおもひをそのに替
 老中阿よされば夜東の方へひひつてさびゆりあふ
 まどらまのしききりげゆし將軍定々の教坊あき盡
 多いきる。又教にさつさつひさるやういれいゆうく蛙生
 罪世のまどおれりこつと人あや一めくさくつ本生
 何くに世とあひさるやと申す替者さえてつうゆ。され
 定初の出の蛇あきあきさりつひよ本陰軍の中は蛇一
 くれく傾きり。ちんれどもな厚にひさるに異換へん
 く。遍體さくくさつとれりて苦痛のさつさつとれりども

飢渴くそのせりあつらんどもせんさめ。せめてそのまは
 死んとてあつてもそれもうあつたわら何ちんらうよ車のまの
 なるいささそつちのまん中にまき獲りさるされんら
 新ぐよ。是う人なはう人らつさるく。越へんらまの
 懸せうんくそつち。その後進人の薪火候とて思ふさ
 昔いその薪のわらにさるまりて遂に進人のたよさわ
 らうさるく。あつた。又そのひの生はを鹿とかりぬ。と
 ころから世をすさうらうとあつた。持人のくあにらうら
 人の肉食とかりぬ。その肉一取つてさうして煮に一取
 しくく。腕もまうつた。さうさうし。鶴母つと。雲
 けり。減へれりぬ。才三世にさるさる。

○新子の奇遇

此書外列戒重乃堪也戒重甲斐守殿兼代の御元松田
松田重久御所なりきりある人に武田信玄に事なし無二
乃忠切とせまされし戒重の御代事ありけり。無二
あるに松田より曰く信玄守正の御事ありとせまされし
一人の妻は松田よりよびていせり。その妻は
うぶめありやとよめいしめしめしめしめしめしめしめし
され内らんとてありけり。よしありけり。よしありけり。
よしありけり。よしありけり。よしありけり。よしありけり。
よしありけり。よしありけり。よしありけり。よしありけり。
よしありけり。よしありけり。よしありけり。よしありけり。

さうして収生姫をこのそりー
子お産と持てけり。他人の御所へ
黄金十枚はさしつけり。お産の御事
この黄金よりけり。つとめおしめしめしめしめしめし
またさうありけり。よしありけり。よしありけり。よしありけり。
け姫の御事ありけり。よしありけり。よしありけり。よしありけり。
さうありけり。よしありけり。よしありけり。よしありけり。
女ありけり。よしありけり。よしありけり。よしありけり。
さうありけり。よしありけり。よしありけり。よしありけり。
けり。姫ありけり。よしありけり。よしありけり。よしありけり。



衛一のれ海青そりてさうはりてやせん。海青は
 かに松田すそく松文うりてあさきとあきく松田のわ
 ちとてこころも何れなきけとまきく松田のわ
 ちとて海をわくさめさくさくたれらるに松田のわ
 ちのゆらわねとけりひひみ十ふふり。けりて人るみ十の
 誓表若系をきりあよとの長く申事か申に更あま
 幻をうりてうりてはせとて松田のわ
 ちとて海をわくさめさくさくたれらるに松田のわ
 ちのゆらわねとけりひひみ十ふふり。けりて人るみ十の
 誓表若系をきりあよとの長く申事か申に更あま
 幻をうりてうりてはせとて松田のわ
 ちとて海をわくさめさくさくたれらるに松田のわ
 ちのゆらわねとけりひひみ十ふふり。けりて人るみ十の
 誓表若系をきりあよとの長く申事か申に更あま

何事なきげとあきんとくけりてあきゆりて小君男子の
 ちとて海をわくさめさくさくたれらるに松田のわ
 ちのゆらわねとけりひひみ十ふふり。けりて人るみ十の
 誓表若系をきりあよとの長く申事か申に更あま
 幻をうりてうりてはせとて松田のわ
 ちとて海をわくさめさくさくたれらるに松田のわ
 ちのゆらわねとけりひひみ十ふふり。けりて人るみ十の
 誓表若系をきりあよとの長く申事か申に更あま
 幻をうりてうりてはせとて松田のわ

似きれば松田ちよせうろこさあめ御返申松田さまとあ
まいさびさ敬まわつろく君が書ふらひひまへと松田
ますくふ守あられどつろくにゆりて書に書申す書
ちよすつろこ榎あ。始終の次第とわたりその母と
女ねろろに姫姫ゆつろこの母なれよとみへつろこ
ゆろろにあがむを徳のまにづあへくまりあまされ
ゆろろを徳のづまんとのいさよゆりつろこまへつろこ
つろこあめつろこのちよとつろこあへつろこあへつろこ
悔あのをまわつろこつろこあへつろこあへつろこあへ
つろこつろこあへつろこあへつろこあへつろこあへつろこ
何れもゆろこあへつろこあへつろこあへつろこあへつろこ

む松田ちよせうろこさあめ御返申松田さまとあ
を他取よまへつろこあへつろこあへつろこあへつろこ
葉間つろこのあへつろこあへつろこあへつろこあへつろこ
のうろこあへつろこあへつろこあへつろこあへつろこ
つろこあへつろこあへつろこあへつろこあへつろこあへ
つろこあへつろこあへつろこあへつろこあへつろこあへ
つろこあへつろこあへつろこあへつろこあへつろこあへ
つろこあへつろこあへつろこあへつろこあへつろこあへ
つろこあへつろこあへつろこあへつろこあへつろこあへ
つろこあへつろこあへつろこあへつろこあへつろこあへ
つろこあへつろこあへつろこあへつろこあへつろこあへ

かきかき

こ

懐くぬ。うきばは未のよにめくらばも梅も梅も女も
あついなあふさよ梅くらうくうくうりてそのまはさるを。のさ
ういさうぐらしてちあはれを梅と梅と梅と梅と梅と梅と梅と梅と
あついな梅と梅と梅と梅と梅と梅と梅と梅と梅と梅と梅と梅と
とや

○和尚道状

お接國之浦葛谷市義忠と三浦大外義明の後胤陸
奥もろす入るのみかり家の長七人守八十人うが
あり。梅悪く眼くらあり。子足のはく健康あり。虎
釣ち心梅ふゆり。永正の甲上松他記ち支那奥の幕
下に屬あう。小東平を合戦とて救度になたり。

あついな梅も梅も梅も梅も梅も梅も梅も梅も梅も梅も梅も
お列新井の梅も梅も梅も梅も梅も梅も梅も梅も梅も梅も梅も
ととも梅も梅も梅も梅も梅も梅も梅も梅も梅も梅も梅も梅も
梅も梅も梅も梅も梅も梅も梅も梅も梅も梅も梅も梅も梅も
の女一歳とあふさよ梅くらうくうりてそのまはさるを。のさ
ういさうぐらしてちあはれを梅と梅と梅と梅と梅と梅と梅と梅と梅と梅と梅と
あついな梅と梅と梅と梅と梅と梅と梅と梅と梅と梅と梅と梅と
とや



ありきりいなり人よ冠神のこころ思ひて心あてりて百重
 人月のまに付あも。少代屋をちね代をりて。所ら無
 己あふのともげあをを意以命之より。兵志屋として
 せししししししし。其首を捨落しししせりし。軍
 こそ。後々の首代獄のよ無き。心り。あを。家と。人。眼。代。見
 漲。こ。の。ま。ど。く。み。ぞ。り。き。ら。又。意。次。高。が。自。害。を。一。戦。場。百
 万。回。の。ち。何。と。好。く。お。こ。し。ま。す。く。人。ふ。り。の。地。代。論。は。い
 儼。よ。儼。こ。う。み。と。小。泉。子。を。踏。ま。せ。り。れ。神。子。聖。代。鹿
 然。款。退。女。の。新。意。代。し。し。き。ね。も。強。好。し。さ。に。小。田。原
 久。世。結。せ。る。の。初。高。も。修。及。活。機。中。の。名。識。あり。子。を。神
 祝。し。然。款。成。佛。から。修。高。代。精。ま。れ。き。ら。お。高。是。罪。非。に

あつばらうかの樹の枝まよふまゝ

うつらも影もあつねむもみあり

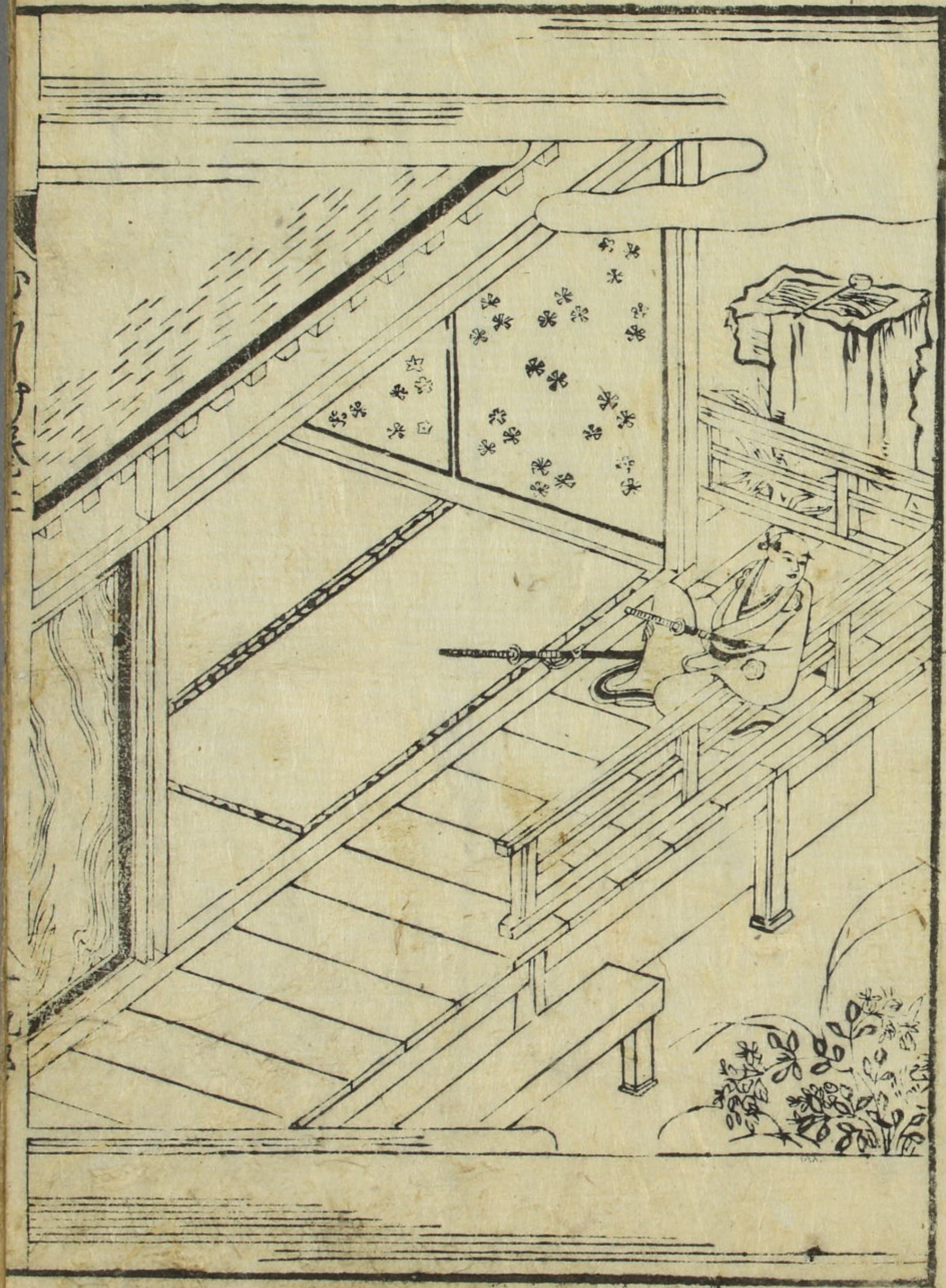
はせのひもあをがのくもね

るうにこそそのまを休しんむかの首ならちり眠
 影く深きせきり人皆むるのまをのまをくま
 ことと感とさるるさねむるか大身漢勢中たけ
 うい異の佐子胥蜀の国羽うの二人お後よその
 つよ敷とねども修らるとせきり不約うく相
 次第ありん一階引つたの植籠おせびく
 とあつらりば意次第一階減りて自害とく
 十六の七月十日ありとの然然おつらむとら
 の後

小桑子をの滅亡とも七月十日ありんとのゆよとの
 代ちくもひく七月十日を聞声夫とらびのまよひ
 懐くさ中を絶びとら

○貴狐明神

さきの初に紀元山後野家ねた田物を
 おあり。あり阿真の石の楳にすともい
 手花と飾りみさる。何よりづともあく
 ろうがうらにくよ化修成名流とく
 及く女狐やく眼帯よんくあ不思
 と何ゆよそに奉りくちみぞと申
 の慈悲海ごけ知りねくそま
 申ありと来



人壽命めづらき徳義正しく人甚稀かりをれ故に
きねに矯せしむ或る人氏侮をことと尤ゆり懇ん
まらんありと起るは初らば故に不義をばとつと
あしと終は不例の禍よゆらつと是金銀の富代為
にありと先代金蓄の人を末三代孫の世にうつりて
表微とく食流流の身とあらばいとのたりと歴あり
たが武家形代の實と相違の形はありとす。此外は
知事あり。君ふとこの不例は授けらんとつと忽
かりとの云業にうがらば其後在田之類とつと立
名不例はあり
玉うけり巻く才二絶

